

5 畜 産

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 農作業機械等の点検と準備</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○農作業機械等の点検と準備 ○春先に向けた吸血昆虫対策 <p>4月からイタリアンライグラス等の収穫や夏作のは種が始まるため、トラクターやは種機等の点検整備を行う。トラクター本体のカバーを外し、ラジエータのフィン部分のゴミをエアコンプレッサー等で吹き飛ばす(写真1)。冷却水サブタンクの量・漏れ・色を確認し、白濁している場合は交換する。各オイル等については、アワーメーター表示を基準としてメーカーの推奨する時期に交換する(例:エンジンオイル 200時間、エンジンオイルフィルタ 400時間、ミッションオイル・フィルタ 300時間)。グリスアップについては、50時間または1年毎のどちらか早い時期に実施する。エアクリーナエレメントに汚れがないか確認し、汚れていればエアコンプレッサーでほこりを落とす(例:清掃 50時間、交換 300時間)。タイヤについては空気圧が適正か、亀裂・摩耗・ボルトの緩みがないかを点検しておく。</p> <p>作業機械の状態は、使用頻度やほ場環境が大きく影響するため、ロータリーやディスクモア等の機械は、爪が摩耗・変形・欠落していないか、ボルトがしっかり固定されているか点検し、緩みがあれば締め直す。直接地面に接触する部分(回転刃等)は、石との衝突等により変形したり、ゆがんだりしている場合があるので、構造や動作に異常がないか十分に点検し修理する。石や空き缶等が機械に入ると刈り刃等が破損するため、機械の整備と併行して、牧草が伸び切らないこの時期に、ほ場の下見や障害物の除去を行う。</p>
<p>(2) 春先に向けた吸血昆虫対策</p>	<p>昨年 11 月に福岡県で国内初のランピースキン病の発生が確認されて以降、令和 7 年 2 月末までに福岡県・熊本県で合計 22 例が発生している。本病はウイルスにより感染する届出伝染病</p>



写真1 トラクターのラジエータ、エンジン点検、整備

項 目	作 業 内 容
	<p>であり、発熱、乳量の低下、皮膚及び粘膜に病変が生じるため、疑わしい症状を見つけたら直ちに最寄りの家畜保健衛生所に連絡する。本病は牛の病気であり人には感染することはないものの、発症牛の生乳出荷や移動の自粛が必要になる。伝搬経路は主にサシバエ等の吸血昆虫の媒介によるものである。サシバエ等については、本病だけでなく牛伝染性リンパ腫や牛異常産を引き起こすウイルスも媒介するため、春先に向けたサシバエ対策が必要である。</p> <p>冬季は牛舎内で見かけるサシバエ成虫（写真2）の数は少ないものの、サシバエは蛹（さなぎ）の状態越冬することが知られており、春先以降の発生源が畜舎周辺に大量に潜んでいる状態である。気温の低い冬季は、卵から成虫になるまでの発育速度が遅いことから、この期間に幼虫対策を行うことで効果的に殺虫が可能である。まず牛舎内の壁・溝、ウォーターカップの下、通路ゴムマットの下やその隙間を清掃し、幼虫が多く生息している牛が踏まない牛舎隅や子牛の牛床全体に昆虫成長制御剤（IGR 剤）の散布を行う。</p> <p>成虫対策については、春先の比較的涼しい時期に成虫となり活動が活発になることから、この時期を逃さず殺虫剤の散布を行うことが推奨されている。1匹の成虫は生涯で600個の卵を産む能力があることから、次世代の成虫発生を防ぐことが重要である。なお、サシバエが薬剤抵抗性を獲得しないように、同一系統の薬剤を連続して使用するのではなく、作用機序の異なる系統の薬剤をローテーションで使用することが推奨されている。さらに牛舎に成虫を近づけないために、防虫ネット及びハエ取り紙の牛舎への設置、成虫の休息場所となる牛舎周辺の草刈も有効である。</p>



写真2 サシバエ成虫
（針型の口吻で吸血する）

（作成 畜産研究センター）